

# 『金的ボクシング』



玉子王子 著

## 一章 まっすぐ行ってぶっ潰す

天藤愛は見上げる。

父親を。

五〇過ぎの表情の険しい、いつも険しい顔をしている父を。昔は多少は笑顔も見せていたが、ここ最近では厳格な顔ばかり見せていた。

弁護士をしていて、躰には厳しく、母にもいつも怒鳴っていた。

今も怒鳴っている。

居間で立って怒鳴る父、床に座り込み、うつむいて泣く母。

「よりを戻す気はない。離婚したら出て行ってもらう」

吐き捨てる父親、仁王立ち。

母の背中に手をやり、しゃがんでいる愛は父親を見上げていた。

思えば昔からそうしていた気がする。

ふと、一〇年以上前のことを思い出す。父と風呂に入っていた時のことだ。ふわっと、軽々と持ち上げられたのに驚き、なぜそんなに力があるのかと聞いた愛。

それに、愛を下した父は、腰を突き出して見せたのだった。

これがついている男だから力が強いのだと。

自分の股間にはない力の象徴を憧れの目をもって見上げたものだ。

——あれで、愛人を……

浮気をした父。愛人が別れてくれと連絡してきて発覚。ショックを受けつつも許すという母に、まさに逆切れして「お前が至らないからこういうことになった、別れて愛人と結婚する」と父が言い出したのは一月前だ。

即離婚とはいかなかったが、それ以来両親は言い争い、最後には母が殴られて泣く姿を何度も見せられた。

——どう考えてもお父さんが悪いよ。なんでこんなことに……

両親が別れたらどうするか。

——お母さんについていきたい。でも、それだと転校することになる。インターハイどうなるの？

女子ボクシングで県代表としてインターハイに出られるかどうか、というところに愛はいる。部だけではなく、学校全体から期待を受けている。

と、愛は思っているが、実際のところ女子ボクシングなどというマイナースポーツの話はあまり誰もしていない。

が、部の中では期待を受けているのは間違いないし、彼女自身何としても出たいと思っている。

転校などしていたら、とてもそれどころではなくなる。

愛人を作り、許すという母に逆切れして別れて愛人と暮らそうという父と暮らすか。

それとも、可哀そうな母についていくか。

普通なら、ついていくしかない。しかし、ボクシングは愛にとって大きい。

昔両親とボクシングの映画を何本も見て、自分もボクサーになるといって近所の子供ボクシングクラブに通うようになった。

才能があった彼女を、厳しい父が珍しく褒めてくれた、世界チャンピオンになれると。

クラブの少し年上の少年に初恋が芽生えたり、ライバルで今や同じ部に通う親友である少女と出会い切磋琢磨したりと、ボクシングは彼女の人生と分かちがたく結びついていた。

——ひどいよお父さん。こんな時期に……っていうか、浮気して、逆切れして別れるとかいつの時点だろうがひどいけど。今は特にひどい。インターハイに出られるかどうかって時に。

そもそも、愛人と一緒になど暮らしたくない。

両親が離婚した後で別の誰かと結婚するというのなら、それは親の人生だ。

しかし浮気して別れてそっちと引っ付くというのは子の立場として受け入れがたい。

捨てられる母の悲しみも痛いほどわかる。

それでも、父を見上げるだけで何も言えない愛。

朝食もろくに食わず、家を出る。

飼い猫、マリモの鳴き声を背中で聞く。悲しそうに聞こえた。

腹を押さえる。

部活に響くから、途中で何か買って食べるしかない。

通学路、まだ店も開いていない早朝の商店街。

「愛、おはよう！」

子供ボクシングクラブ以来の親友小西が声をかけてくる。

「おはよう」

「元気ないね……やっぱり、その、無理っぼい？」

「どうにもならない感じ」

「そうか。あ、それじゃ、こうしたら？　うちにさ、しばらく下宿するとか」

「そんな迷惑かけられないよ」

「迷惑だなんて……」

まあ、迷惑千万だろう。小西にとっては親友でも、親兄弟にとっては知り合い程度でしかないのだ。箸が転がっても笑う女子校生。それがうつむきながら歩く。

と、前からTシャツの男。シャツから出ている腕には刺青。見るからに近づきたくないタイプの男。それが、愛に目をつける。ボクシングには向かない体型。かなりの巨乳。

「あ、お姉さん、落ち込んでるね？　元気にしてあげようか？」

「え？」

「遊ぼうよ、楽しませてあげるからさ」

「え、え」

青ざめる愛。

厳格な父に育てられ、男に苦手意識を持っている。

男と普通に話せる様になるのに普通より多少の時間がいる性格。

「あ、ちょっと、この子男が……」

「うるせー、引っ込んでろペチャパイが」

ボクシングに向けたスレンダーな小西である。

「な、なによ」

「なんだ？ あ、そうか、お前のほうが、俺と遊びたいんだな？ それならそれでいいぜ。ペチャパイでも、下は普通なんだろう」

「こ」

顔を赤くしたり、青ざめさせる小西。

体格は、男のほうが圧倒的だ。背も高いし、筋肉がついていて体重では二倍行くかもしれない。

ただでさえ男が苦手の愛は圧倒される。

——なにこの人、怖い……

チラリと小西を見る。気が強いほうだが、体格のいい刺青男相手では足がすくむ。

ニヤリと笑う男。

——へへ、これだよ。いかついカッコしてりゃ、本来相手にしない女でもビビってくれて、強引に行けば案外上手くいったりする。これこそ「悪い奴のほうがモテる」法則のからくりよ。巨乳ちゃんをやっちゃうぞ。いや、いっそ三Pという道も。

涎を手の甲で拭う。

そこに、特に特徴のない体型の女が近づいてくる。ジャージで、三〇前。

「ちょっと、あなた何してるんですか？」

「あ、コーチ！」

教師兼女子ボクシング部のコーチ。

担任ではないので、二人にとってはコーチという部分が強い。

眉を顰め、ガラの悪い男を見上げる。

「うちの生徒に何か？」

「なんだ？ 引っ込んでろババア！」

顔を近づける男。

それを押すコーチ。

頬をゆがめる男。

「あ、押したな！ 先に手を出したのはお前だからな！ ボコボコにされても文句言うなよ！」

「は？ ちょっと押されただけで手を出した？ あは、キ〇タマついてないのねあんた。男が言う事じゃないわ」

「な、何をっ！？」

顔を赤くする男。

二〇ぐらいである。

年上女性に睾丸がないのではないかといわれると、妙に恥ずかしく屈辱だった。

「お、お前こそチ〇ボ生えてんじゃねえのか！？ ほんとに女かよ」

「そんなぶっさいくなもん生えてないけど、もし生えてても、プラスならいいんじゃない？ 玉無し君はマイナスだけだよね。ね？ ついてないんでしょ？ キ・〇・タ・マ」

ニヤニヤするコーチに、青ざめる生徒二人。

真っ赤な男は襟首をつかむ。

「このっ……顔面ぐちゃぐちゃにして……あぐっ！」

グチョ。

膝を押し出すように男に減り込ませるコーチ。大した勢いではない。

しかし、腰を引き、男が全身に汗をかく。

「く、く、お、お前……」

「あらやだあ、どうしたの君？ こんな体格いい男の子が、ちょっと足が当たったぐらいで演技が過ぎるんじゃないかな？ 歩くぐらいの勢いだよ？」



「え、コーチ」

「何を……」

「んー、二人とも……本当にわからない？ 今の状態と……彼の格好」

股間を押さえ、腰を引いて動けない姿。

見て、ぷっと嘔き出す女子校生二人。

「いや、ねえ愛」

「あは、私わからないよ。美紀は？」

「えー？ おいおい、わかってるでしょ。ねえお兄さんも言ってやってよ」

「な、なにを……」

「私たち女の子より絶対強い、頑丈無敵の男性様が、女の攻撃でこんなことになるからには……攻撃を受けた場所は、一か所しかありえないって」

「えー、どこなの？」

「もう。ここだよここ」

膝を開き、スカートを掴んでピラピラとさせる。

「男の人はねえ、ここにいろいろあるの。女の子にはわからない事情が！ ね、ですよね」

「そ、その……」

「コレ付いてるんですよ、コレ」

ついに指でリング二つを作り、股間の前で示す美紀。辜丸しぐさに顔を真っ赤にする男。

「あ、あ」

「あははは、ねえコーチ、ここ蹴ったんでしょ？ そしてお兄さんは、ここを蹴られて痛すぎる一、でしょ？」

「ば、馬鹿にすんなこら！」

「きゃああ！」

軽く押すように蹴られたに過ぎない。

必死で動こうとすれば動ける。美紀に掴みかかる男。

それに向け、コーチが叫ぶ。

「美紀！ 膝押し出して！ 陰囊蹴るのよ、陰囊！ キャン玉袋をね！」

「キャン玉袋！ コーチ女の子としてもっとぼかしてください……よっと！」

膝蹴り、というか押し出し。

当たらない。相手も動いているのだ。

しかし、大した動きでもないので、連続で出せる。

「ほれほれ！」

「あ、ちょ、そこは反則……あっ、あっ、このやろ！」

腰をひねり、必死で膝蹴りをかわす男。太ももや尻に当たるなら何でもない。

かわしつつ、自分も膝を押し出す。

「きゃっ！ そんなとこ蹴る！？」

ボコボコと股間に当たる。

が、平気で蹴り返す美紀。

態勢が悪く、お互い押し出す程度の蹴りしかできない。

男が美紀を倒すにはまったく不十分。

しかし、美紀が男を倒すには十分。

ボコボコ股間を蹴られている美紀。

だが平気で蹴り返す。

一方、男は必死で腰を捻ってかわす。

一発食らえば、終わりだとわかっていた。

——こちらは男だからワンパンで死、ワンパンで死。蹴りだけど、ワンパンで死。一方で、あいては、同じ形で蹴りまくってるのに……こちらは当りまくってるのに……相手が女だから、平気平気。っていうか、蹴り返す意味なくねえかこんなん？ でも、避けてるだけじゃ終わりだ、蹴り返すしかねえ。避けながら……。

鬼気迫る表情で腰を振りまくる男に、手を叩く愛。

「ぎゃははは！ コーチあの人必死ですよ！」

「笑っちゃ悪いわよ。男の人にとっては、死活問題なのよ」

パン、とジャージの股間を叩くコーチ。小さめのサイズを選んでいるためか、尻や股間の形がはっきり浮き出している。男だとあまり股間がぴっちりしていると前が苦しくなるが、女はスタイリッシュなズボンが穿ける。

その股間を叩いた力は、先ほどの膝蹴りより強いほどだ。だが、ビクともしない。

「男の人はね、股間が弱い。キ〇タマ付いてるからね、タマタマ。見たことある？」

「あ、お父さんの……」

見上げたモノ。子供の時に見たからか、最近周りの女子から聞いた周囲の男たちのモノのサイズと比べると、かなり大きかったように記憶していた。

小柄な幼女から見れば大体のモノは巨根であるが、それとは無関係に彼女の父は実際かなりの巨根であった。

だから余計、父の厳父のイメージも重なって巨大なものだという記憶があった。

コーチが、にんまりしながら話す。美紀と男が必死で蹴りあっているが、もうどっちが勝つのかは体の構造的に明らかだと思っているのか、何の心配もなく愛と話していた。

「うふふ、男のボールってね、すごく弱い。弱すぎるの。女にわからないから弱い振りしてんだろって、結構金的経験積んでる私も今だに思うぐらいよ。コーチガン潰せば男はイチコロ。お股蹴ったら男は一発。大丈夫大丈夫、ナノ薬有るから、マジで潰しちゃってもいいのよ。やれやれ！ 美紀！ 金的蹴って！ 金的蹴って！」

ナノテクノロジーが発達した世界である。大体の怪我は一瞬で治せる薬がコンビニで安く売っている。睾丸の一つ二つ潰れても瞬く間に治せるのだ。

それは男にとっては万が一の場合の安心を意味する。

女にとっては、自分についていないので仕返しを恐れず遠慮なく狙い撃ちできるし、ある程度理由があれば「治るんだからいいだろう」と軽い気持ちで潰しにかかれることを意味する。

「あがっ！ おおおおお！」

「きゃ、やった！ 美紀がキン……ボール蹴った！ 男のボール蹴った！」

「うあ、ぐにゃっとなったよ！」

「あう、あううううう」

股間を押さえ、内股になって腰を引く。少しでも痛みがましになる気がするので、無意識に腰をグネグネとふる。

と、それを指さすコーチ。

「ほら、見て見て。これがキ〇タマダンス」

「えー？ 踊り？」

「くねくねしてる！ 美紀強く蹴り過ぎじゃない？ 玉潰れて男じゃ無くなっちゃったんじゃない？」

「ぎゃははは、ダサいわ、ダサすぎるわ。これ見ると、マジで女でよかったと思えてすごいい気分になれるの」

ニヤニヤ笑いつつ、男の肩を叩く。

「ね、お兄さん、睾丸痛いんですか？」

「お、お前ふざけてると……あっ」

背後に回り、羽交い絞めにするコーチ。

「あは、力でないね。タマタマ痛すぎるんだ？ ほら二人とも！ 金パンチ！」

「えー！ あははは！ 金パンチって！」

「ぎゃははは！ それって、そこを？」

「ひい、や、やめろお前ら！」

「あ、お前だって！」

「えっらそー」

「さすが、男性様は態度がデカイ！」

しゃがむ二人。

男の股間を見てニヤニヤ。今すぐにでもパンチを叩き込める。叩き込めば、急所攻撃である、今以上に男が弱るのは目に見えている。

膝を締めているんで蹴るのは難しいが、パンチなら関係ない。

「ほらほら、早くやりなさい。で、力加減だけど、このパンチングボールはすぐ破裂しちゃうからね」

「あ、それじゃ、思いきりいってコーガン破裂……」

「違う違う、手加減してあげて……大事に大事に、タマタマを磨り潰すようにパンチしてあげて。あなたたち、壊れやすいパンチングボールを思いきり叩いたりする？」

「あ、それはしませんね」

「それじゃ……」

チラ、と目を見合わせ、せーので拳を振る。といっても同時には殴れないので、順番にだ。

「はい」

「あぐっ！ あおおおお、やめ、あぐっ！」

軽く拳で押す様なパンチ。

とりあえず小手調べのつもりだが、見下ろしてくる男の顔が一瞬で苦悶に歪むのに驚く二人。

「うわ、スゴイ効いてる」

「演技じゃね？ 私のパンチならまだしも、愛のパンチがそんなに効くわけねーし」

「あ、いったな？ 私のパンチなら、美紀のキ〇タマだって一発で潰れるよ」

しゃがんでいる二人。スカートは捲れ、同じようにしゃがんで前から見ればパンツは丸見えだ。

その美紀のパンツをペンと叩く。ぶっちゃけ、先ほどの金パンチより強く叩いているぐらいだ。



「あううう、キ〇タマあああ」

男の苦悶の表情をまねて見せる美紀。しかしもちろん女の子様である、股間への攻撃など相当な力が籠っていない限りノーダメージだ。

平気であることを示すために、あえて痛がる演技をしてみせる。

誰に見せているかという、まったくそこへの攻撃に耐えられない、この場で唯一の人物に。

「くうう……ふざけやがって……」

——畜生こいつら、玉がないから。玉がないからっ、平気な顔で股間叩いて、玉があつて耐えられない俺を見下してやがる。悔しすぎるっ……

「ぎやはははは！ えい」

「ふぐっ！」

「きゃはは、こいつ油断してたよ！」

「よーし、私も……ほれ」



「あがっ！ もうやめ……あぐっ！」

初めは押す程度のパンチだった。

しかしボクシング部の少女たちである、徐々にジャブの形になってくる。

パンパンと叩いては一瞬で手を引く。

そうなれば次のパンチも早く打ち込める。

タイミングを合わせて、空白の時間ができないようにパンパンパンパンパンパンパンパンと、ある種の餅つきのように**男のパンチングボール**を使用する。

「あが、ちょ、やめ、はぐっ」

足を閉じているのでまだまだ。

とはいえ、それほどの防御効果もない。蹴りは足が通る空間をふさぐことで相当防御できるが、前から押してくる形の攻撃を防ぐのは難しい。

柔らかい太ももは衝撃を鞏丸にしっかり伝える。

徐々に腫れ上がる肉玉。

青黒く変色する男の顔。

「あは、効いてる効いてる」

「えー、本当ですかコーチ」

「この顔見ろっつーの。死にそうだよ」

「こんな軽いパンチで死にそうとか受けるー」

「も、もうやめて……」

「うーん、これはタマタママジで潰れてるかもね。よし、治療してあげよう。そこの路地裏に」  
路地裏というか、店と店の間の壁の隙間。

昔は間に店があったが、潰れて左右の店が土地を買い、それぞれに拡張した。

そのためただの蓋した溝などより広い空間ができていた。

人目のないそこに連れ込む。

羽交い絞めのまま引きずり込む姿はいかにもまずい絵面だが、幸い誰も何も言わない。

それほど目撃されなかったことと、連れ込まれているのがガラの悪い男なので、頭に引っかからないようだ。

これが男のほう引きずり込んでいるなら、一人目の目撃者が警察を呼んだことだろう。

ともかく、路地裏。

多少入り込むと、途中で曲がり、外は見えないし声も聞こえにくい。

左右の店はお互いに気を使ってか窓がない。

エアポケットのごとき密室。

コーチは上機嫌に羽交い絞めを続けていた。

「さ、ズボン下ろして上げて。あくまでもタマタマ治療**名目**だから、二人とも勘違いしないでよね」  
名目って言っちゃダメだろ、という突っ込みは誰もいれない。

「え、なんで……やめ……薬飲ませたらそれでいいジャンかよ」

「確かにナノ薬飲ませりゃ、怪我してるなら治るし、してないなら別に何も起こらない。本来なら見る必要なんかないけど、でも念のために意味もなく確認さしてもらおうわ。金ちゃんが無事かどうかね。ほら、脱がせてあげて」

コーチの言葉に、ボクシング少女が見合う。

「それじゃ……愛やる？」

「む、無理」

「だよねえ。仕方ないわ。あは、嫌だなあ？ うひ」

「やだ、やめてっ」

「へへ、嫌だけど仕方ないね、医療行為のためじゃけん」

——嫌がるクソ野郎のズボン下ろすのは楽しいよねえ。小学校の頃は、生意気なクソ男子によくやったわ。チ○ポ摘まんでやったら大人しくなるの。女の子に摘ままれたら仕返ししようがないから、心折れるのかな。よくわからないわ。

ズボンを掴み、パンツもろとも下ろす。

ブルン、と玉が大きく揺れる。

「おお」

潰れないように、しかし執拗に殴られ続けた睾丸は見事に腫れ上がっていた。

「うわ、金袋がカボチャみたい」

「キ○タマパンパンねえ。あは、パンツ脱がされて、抑え込むものがなくなったから一気に腫れ上がったのね」

「ち、治療して……」

「もちろんするよ。でもねえ、女の子を強引に誘って、文句言った女の子の顔面ぐちゃぐちゃにするとか言い出すクソキ○タマは、一回潰させてもらうから」

「ひ、ひいいい。あっ」

羽交い絞めにしているコーチが体重をかける。

バランスをとるために足を開かざるを得ない男。

ゆさゆさと巨玉が股の間で揺れる。

「きゃー！」

「マジでパンチングボールじゃん！」

「タマタマをできるだけ下に引っ張って、ズボンのベルトで縛ると完璧。縮むこともできないからね」

「ひ、ひ、ひ」

「それじゃ、練習開始ね」

美紀が男のズボンをコンクリートの上にして座り、男の股の下に入り込む。

「え、なんで？」

「前後から叩くためだよ。愛は前から」

「あはは！ これなら確かにパンチングボールみたいに行けるね！」

「ひい、もうやめ……あぐっ！」

ドム、とボールのように腫れ上がった巨玉に後ろから美紀の拳。

後ろからのほうが急所中の急所である副睾丸に当たりやすい。

背後からの金パンチ地獄説といったところだが、そんなことは全く考えもせず、前後から男のパンチングボールを叩き合う二人の少女。

叩かれると根元が引き千切れんばかりにのび、反対の方向に振られる。それをもう一人が殴り、戻す。

連続で殴り、前後に鞆丸パンチングボールを勢いよくやり取りする。

「あぐあがあがあがあがあがっ！」

叫ぶ余裕もなく、短く喚き続ける男。

頭を振り、唾を飛ばす。足を閉じたくとも、バランスを取らねばならないため敵わない。

いっそバランスを取るのをやめて倒れてしまったほうがましという気がするが、度重なる金的でそこまで頭が回らない。

大体、倒れたら倒れたで多分、非力な女性でも一撃でどんな男でも悶絶させられる超必殺技「鞆丸踏み潰し」が来そうであるから助からないと本能的にわかっているのかもしれない。

足の付け根を踏んで、体重をかける。それだけでどんな女性でもあらゆる男を戦闘不能にできる。男のほうが単純な力や頑強さで圧倒的に女に勝っているのは言うまでもない。

しかしその強さは女がその気になれば文字通り簡単に踏み潰されてしまう儂いものなのだった。

ボムボムボムボム、前後からのパンチで激しく動くパンチングボール。

「うわ、熱いよこれ！」

「すごい熱持ってきたね！ 腫れ上がってるから当然かな？ っていうか、さっきよりデカくなってね？」

「あはは、こいつ泡吹いてきた。っていうか、チ○ポ小さいわ。ドリルじゃん」

「ぎゃはは、さんねーん」

「いやいや小西、大きいと金責めには邪魔だから。変態野郎ほどデカイから、ドMは大体巨根が金責めの邪魔になるから、腹にテープで貼るか、根性あるならあらかじめちゃん切りという手もある」

「根性あり過ぎ！ おチン○ン自分で切るんだ！」

「いや、蹴る側が根性あるドS女子なら切るという話」

「うわあ」

「切るという選択肢もある、という話。でも、平均サイズは欲しかったなあ、握ってさ、ブチと行けたのに、引っ張って引っ張って一、切れる切れるって喚く男を無視して、まだ大丈夫大丈夫って言いつつ、引き千切るのは楽しいんだ。……っていう、一般論」

「はあ」

——いやいや、この人ヤバいわ。マジでドS女子じゃん。それも玉蹴りだけでは満足しない、チン○ンちゃん切ったり引き千切る猛者だわ。ヤベえよ。

怯えつつも、美紀は軽快に金パンチ。

「あがっ、あがっ！ ひいっ！ もう許して……あぐっ！」

前後から、ボクシング女子が金パンチ。

羽交い絞めのコーチが目を爛々と輝かせる。

「ほらほら、もっと軽やかにパンチパンチ！ そして、そろそろやっちゃえ、コーガン破壊！ ほら、タマタマ破裂、タマタマ破裂！ 大丈夫、再生薬は女のたしなみ。ナプキン忘れても、タマタマ再生薬は忘れないのが大人女子よ」

世界一ドS女子が多いといわれるうさぎ県の大人女子という事が一々恐ろしい。

ボムボムボムと、巨玉が前後する。巨玉というかも両玉が袋をギリギリまで膨らませてバスケットボールのごとくだ。袋が薄くなり、細い血管まで見える。

「ぐむ、おごおおおお」

涎を垂らし、青黒いような、灰色のような、土気色のような、なんだかわからない顔色の男。

一つ言えるのは、**人間がしていい顔色ではない**という事。

白目を剥きかけているが、気絶するには肉バスケボールのボコ殴りは刺激が強すぎる。一発一発はさほどのことはない、**ちょっとした地獄の苦しみ**でしかない。

だが、それが絶え間なく続くのがまずい。

むしろ一発で終われば、気持ちよく気絶もできるかもしれないが、連打されていると無理やり覚醒させられる。

とはいえ、深い部分では意識を保つための力がゴリゴリ削られているのは言うまでもなく、続けられればいずれは気絶を乗り越えて**意識不明に陥る**だろうが。

アメリカのある種のアニメにあるようなありえない肌の色になる男に対して、少女二人は意気軒高。目を輝かせ、唾を飛ばして素早いジャブを打ち合う。

「そらそらそら！」

「キンキンキンキンキーン！」

「痛いのか キ○タマ痛いのか？」

「大丈夫？ 痛かったら言ってね」

「痛い痛い痛い痛い痛い！」

「ぎゃはは！ 痛いらしいよ！」

「ふーん？ ……でっ？ ていう」

「玉が玉が玉が玉があああああ！ 痛い痛い痛いいイイイ！」

痛すぎて声あげられない状況を超え、**命を燃やして絶叫するフェーズ**に入ったらしい男。

少女らはむしろテンションが下がる。

「玉がなに？」

「痛いんじゃないか？ 知らんけど」

「私も知らんわー、だってキ○タマついてないし」

「持ってない臓器の話されてもついていけませんわ。あ、経験豊富なコーチならワンチャン？」

「いやあ、**何百個潰してもよくわからない**わね」

さらりと爆弾発言だが、もはやこの場の誰もそれを追求しない。爆弾発言と認識していない。

もしこの場の三人に落ち着いたところでインタビューしたなら、「この女なら四桁いってんじゃないか？」というようなことを口をそろえて語るだろう。

高々数百個で驚いてもらえるような大人しい言動をとっていない。

「どれだけ玉潰ししても、所詮私も女の子ですから？ 今だって、あんたたちのパンチが本当に聞いているのかさえ曖昧」

どう見ても死にかけている。臓物をパンパンに腫らし、唾を飛ばして絶叫している。

それでも「ついてないもーん」で感情移入不可能を主張する無慈悲すぎる女の子様。

——って、まあ実際にはわかってんのよ。多分痛いんだろうねー、ってことは。さすがにそこはね。

男の睾丸はすでに腫れ上がるだけ腫れ上がり、本人の頭より大きい位だ。重量で、根元が千切れないうのが不思議なほどに垂れ下がっている。

愛たちは知らないが、元のサイズはやや大きい程度なので、その肥大ぶりがわかる。

肥大の割合がどの程度かわからないのは仕方ないとしても、頭ぐらいに腫れ上がっているのだから相当なものだとわかりそうなものだが、共感のありようが「多分痛いんだろうね」でしかないというのは、男から見れば男女の感覚の違いに恐怖を感じるしかないだろう。

口に出していないので、誰も知らないが。

「ふー、疲れた」

「っていうか、手が痛い！」

「グローブつけりゃよかったね」

「コーチ、お仕置きはこの辺でいいんじゃないですかね？ 十分この人も反省したろうし」

百パーセント「疲れたし手も痛いから切り上げたい」という自分の都合で話す愛。

「そう。それじゃ、二人とも、この人支えて。ヨロヨロで、立ってるのがやっただから」

「おー」

「コーチの黄金の右が炸裂」

「そしてこの人の**黄金が爆裂**」

「ひ、ひいい」

逃げようともがくが、金的のダメージでもはや身動き取れない。巨玉がずっしりと重く、文字通り重しとしてその場に止まらせる働きをしているのも大きかった。

ともかく、愛と入れ替わって男の前に立つコーチ。

両手を握って天に突き上げ、目を見開く。

「いい——————やっ！ はああああっ！」

「ひっ」

「ぎゃはは、ビビってる！」

「っていうかどういう気合いなんですかね」

「行くぞ行くぞー、金ちゃんに、全力パンチをぶち込むぞー。普通の状態でも当たりが悪けりゃ睾丸破裂。それは私のパンチが強いわけじゃなくて、おキンキンが弱いからだけど、パンチが強いからより潰れやすいのは言うまでもなし。それが、こんなパンパンに膨れ上がった状態なら猶更」



シュッシュと拳を振ってみせる。

巨玉に向けても掬い上げるように振ってみせる。

脅しまくる。

金的煽り。

「あ、あつ、やめ……もう」

「うふふ、どうしよう？ 何ならここで止めてもいいよ？」

もちろん百パーセント嘘で、彼女は絶対に何が何でも辜丸破裂させるつもりである。

むしろそろそろ切り上げなければ遅刻するので、一回だけ潰すので勘弁してやるのは優しいとすら思っていた。

自分の都合百パーセントで切り上げるが「優しい」というのも無茶な話だが、本来なら大した理由もなく人の顔をぐちゃぐちゃにするなどと言い出す刺青イキリ男など百回ぐらい辜丸を磨り潰して女の恐ろしさを思い知らせるべきと彼女は思っている。

その基準からすれば、確かに一回潰して終わりは優しいといえば優しいだろう。

「それじゃ、潰すよー？」

しゃがみ、拳を引く。

「3、2、1……おらっ！　ぐっちょー！」

シュ、と拳を振り、寸止め。

当たっていない。

だが、男は誤認して顔を強張らせる。

「はぐっ！」

その反応を見たい、というよりも、させて笑いたいがための寸止め。

指さして笑うコーチ。

「ぎゃははは！　いやいや、パンチは止めてる、止めてる！」

「当たってないのにダメージとか！」

「キ○タマ弱すぎー、ついてなくてよかった。こんなもんぶら下げてたら、いくらボクシングしても強くなれないでしょ。ちっちゃい女の子にキンってやられたら負けちゃうじゃん」

「うわああ、もうやめてくれ……」

「うふふ、どうしようかな？」

やめる気はない。

一ミリとたりともない、絶対に彼女は睾丸を潰す。

だが、やめる可能性があると思わせることでどっちつかずの宙づり感を演出してより苦しめようという熟練のドS女子らしい心憎い演出。

首を傾げ、男の顔を覗き込む。

——あはは、マジビビリ。タマタマが痛すぎて顔色も人間の色じゃねーし。ああもう、タマタマ責め楽しすぎる！　エッチより楽しいでしょこんなん！　っていうかヤバ、やりたくなってきた！　こいつの極小チ○ポいも**バグ勃起**してたらヤバかったわあ。縮み上がっててくれてラッキー……ラッキーじゃねえか。

「ゆ、許して、許して、あ、お金払います！」

「金？　そんなもん受け取れるわけないでしょ？　恐喝じゃないのよ」

「いやいや、変な意味じゃなくて、迷惑かけたお詫びに……」

「うわー、冷めるわ。盛り下がるわ。せっかく金ちゃん責めでいい気分だったのに」

いいつつ、コーチは股間がじっとりと濡れるのを感じる。さっきから濡れていたが、さらにだ。

——うわ、こいつ金払ってまで助かりたいんだ。こんないきがってる奴が、女や子供に「お金払うからタマタマは許して！」って言ってるんだ。そこまで追い詰められてるんだ。タマタマを、割と軽い力でパンパンパンパンやられ続けただけで。あー、ほんとに男の急所なんだなあ、おキンキンは。それを一方的に狙い撃ちにできる、女に生まれてよかった！　マジ濡れる！

「本当はもう助けてあげる気だったけど(嘘)そんなこと言われたら逆にもうタマタマ潰すしかないわ。ちゃんと謝って、お金出すなんて変なこと言わなきゃ助けたのに(嘘)あの子たちだって、本当はもう許してあげてっていうつもりだったじゃないかな？」

「コーチの言う通りだよ(嘘)もう許してあげてっていうつもりだった(嘘)でも、そんな買収みたいなこと言われたら、逆に許せないよ」

「私も同じ気持ちだな。そんなにタマタマ腫れ上がらせてるのを見たら、もう許してあげないとかわいそうだと思ったもん(嘘)でも、お金出すからとか……私たちがお金欲しがってるみたいに言われたら、助けられないよ。本当は、もう助けてあげる気だったんだけど(嘘)」



同情に満ちたような表情で男を見る三人。

震える男。巨玉は重過ぎて縮み上がらない。

——こ、こいつら……絶対嘘だ。助ける気ははじめからなかったんだ。ふ、ふざけやがって、仕返ししてやる、今度、こいつらの玉を逆に……あ、付いてないわ。だから、こいつらはやってくるんだ、安心して金的を……

「んー？ 何見てるのかな？」

仕返しを考え、それが無理であることに絶望する男。

その視線が自分の股間の辺りをなでたのに気づくコーチ。

「あは、もしかして、一発逆転金潰し狙ってるう？ 無駄無駄、無駄だよ、なぜなら私は女の子なので……」

ズルリ、と軽々とジャージのズボンとパンツを下ろして、女の部分を見せつける。

「潰すものとか、付いてないからねー。ほらほら、見える？ あんたら男の大好きなモノ」

「ぎゃはは！ コーチ大胆！」

「さすが大人の女ね！」

「いやいや、金的してそれっきりってのはかわいそうじゃない？ だからいつも男の人が見たがるおまんこを見せて慰めてあげるのよ、できるだけ」

——ってのは建前で「女に生殖器を攻撃されつつ、使わせてもらえない女性器を見せつけられる」ってシチュエーションで男に屈辱を与え、屈辱に震える男を見下すのが好きだからマン見せしてただけなんだけどね。これはそう、お腹空いてる人に、食べ物を見せつけて食べさせないのと同じようなノリかな。

女からの金的攻撃には性交相手として認めず、拒否するという暗喩がある。

女性器を見せつけることで、それをさらに強調するというのがマン見せ嘲笑である。

唇をかむ男。

「くううう」

——ああ、マ○コ、マ○コ……玉無しの股間。こんなにパンチされても、何ともない股間。っていうか、そもそも前後から振り子みたいにパンチできる構造になってない。くそ、汚ねえぞ、内臓を体の中におさめて守るなんて……って、それ当たり前の話のような。

女の股間が優れているというより男の股間が設計ミスなのではないかという本質にたどり着いてしまう男。

が、浸っている時間はない。

そろそろ引き上げねば、遅刻してしまうという女三人の事情が現状では最も重要な事柄なのだ。

「はい、注目！」

手を叩くコーチ。

立ちあがり、少し離れる。

最後の一撃を、ポケットとしている所にぶち込むようなことはしない。

しっかり認識させ、睾丸破裂を狙う女の金的攻撃を最大限恐怖させたうえで、行うつもりだ。

「そろそろ終わらせないと学校に間に合わないの、悪いんだけどおキンキン潰させてもらうね。潰し方は、こっから勢いをつけ、まっすぐ行ってぶっ潰す、右ストレートでぶっ潰すという形で。足をまげてね、姿勢を落としてグチョっと、変則右ストレートになるかな」

「やめてくれっ！ 何でもします！ き、キ○タマという弱点をぶら下げた弱弱な男の分際で、女性様に逆らって申し訳ありませんでした！」

「初めからそうやって殊勝な態度をとってたら助けてあげたのに(嘘)」

「ていうかその人何言ってんの!？」

「ぎゃははは! 急に男であることを卑下しましたよ!」

男を支えつつ、唾を飛ばして笑う二人。

と、コーチが動く。

「おらっ!」

踏み込み、腰を回転させ、膝を沈ませて右拳をまっすぐ斜め前につき下ろす。

グチョ、と巨玉に減り込む。

上手く真ん中に当たり、衝撃が両玉に広がる。拳が両玉の間に減り込むが、玉が逃げる場所はない。

腫れ上がり、強度が落ちるだけ落ちている睾丸が相次いで破裂。

白と赤の混じった内容物がドリルのごとき一物から噴き出す。

「あぐあああああああ!」

「やだ、なんか出てる!」

「血のションベン!」

「ションベンって!」

「二人ともみて、ほら、金袋がトロトロに」

「うわ、やだっ! 中の玉が形なくなっちゃったんだ」

先ほどまではバスケットボールでも入っているかのように膨れ上がっていた巨袋だが、中の体積はその儘に、完全にぺっしゅんこ。内容物が固体から液体に変わった袋の形の激変に目を輝かす女子校生二人。その様を見て満足げなコーチ。

「よく見ておいてね、男なんて威張ってても、タマタマがこうなっちゃったらお終いだから。そして、こういうふうにするのって結構簡単よ。今のは、割と楽しみながらやったから時間かかったけどね」

「楽しみながらって! っていうか、パンチ一発でミンチって……どんな臓物なのかな?」

「卵二つを袋に入れて、殴ったら二つとも潰れるでしょ? それと同じ理屈だと思うわ」

「卵って……そこまでタマタマって弱いんだ」

「よりによって蹴りやすいお股に卵が二つついてて、それ潰されたら男じゃなくなるとか……男って、弱いんだなー」

言いつつ、泡を吹いて倒れた男を見下ろす愛。

——お父さんも、おキンキン狙えばこう? ううん、お父さんに限ってそんなことないよね。そりゃ、お父さんにとってもタマタマは急所だろうけど……

そびえたつ厳父は、愛にとっては一種のカリスマ、自分のような子供が、女ごときが、今倒れているしょぼい男のように倒すことなどできるわけがない。

何とか父の機嫌を損ねないようにして、折り合いをつけるしかないのだ。

体験版終わり

この後愛たちは部に嫌がらせに来た不良たちを金パンチで撃破

キレてナイフを取り出した不良たちにお仕置き、  
サンドバッグ用の器具にM字開脚でぶら下げ、陰囊パンチの嵐

そうして男の弱さを知った愛は見上げて恐れてきた父親をも急所攻撃で悶絶させ、  
見事両親の離婚の危機を解決する。

女を舐めている不良たちが玉責めで敗北し、

家族で唯一の男として女たちに君臨してきた父親が娘の急所攻撃で敗北し、睾丸を持つ男であるという理由で立場がヤバくなる金的逆転物語。

ぜひ製品版でお楽しみください。